

母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響

—養育態度→家庭における問題行動→園における問題行動というプロセスの検討—

中台佐喜子・金山元春・前田健一

Effects of mother's attitude for child rearing on problem behaviors in young children

Sakiko Nakadai, Motoharu Kanayama, and Kenichi Maeda

母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響について「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」というプロセスを仮定し検討した。母親の養育態度は「受容」と「過保護」から測定された。家庭と園における幼児の問題行動は、いずれも「不注意・多動行動」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」から測定された。母親の受容的態度は家庭における幼児の不注意・多動行動と攻撃行動に負の影響を及ぼし、母親の過保護は家庭における幼児の攻撃行動に正の影響を及ぼしていた。家庭における幼児の問題行動は園における同質の問題行動に正の影響を及ぼしていた。本研究の結果は「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」というプロセスを支持するものであった。

キーワード：問題行動，幼児，母親，養育態度，園と家庭

問題と目的

幼児期に適切な社会的行動を行えるか否かは、その時期の子どもの適応にとって大きな問題となるだけでなく、後の社会的適応状態を左右する要因となることが知られている。例えば、前田（2001）は、社交的行動を示す幼児は仲間から人気がある一方で、攻撃的行動を示す幼児は仲間から拒否されていることを明らかにした。また、前田（2001）は、こうした個人の社会的行動特徴と仲間集団における人気度との間に見られる関係性が幼児期から児童期を通じて発達的に一貫していることを実証した。中澤（1996）は、幼児の適切あるいは不適切な社会的行動がどのような機序から現れるのか明らかにすることは、幼児の社会的適応を促す手段を開発することを可能にし、それはまた、将来の不適応の予防につながると述べている。

社会的行動は学習を通して獲得されるものであり、その学習場面はさまざまに考えられる。なかでも、家庭は幼児が社会的行動を学習するのに重要な場面である。幼児期は家庭がまだ生活の大部分を占めており、主に仲間関係の中で社会的行動を学習していく児童期以降に比べて、幼児期は親から養育を受ける中で、親の行動をモデリングしたり、幼児の行動に対する親からのフィードバックを通

したりして社会的行動を学習していくという側面が強いと考えられる。つまり、幼児の社会的行動の学習には、親の養育態度が大きな影響を及ぼすと考えられるのである。

こうした考えに基づいて中台・金山（2004）は、幼児の主要な養育者である母親の養育態度が幼児の社会的スキルに及ぼす影響について検討した。社会的スキルとは、円滑な対人関係を形成、保持していくために必要な認知的判断や行動に関する技能（吉村，2003）で、ある環境の中にある特定の状況にふさわしい様式で望ましい結果を得ることができる社会的行動として示されるものである（King & Kirshenbaum, 1992）。

中台・金山（2004）は、母親の養育態度はまず家庭での幼児の社会的スキルに影響し、家庭において獲得された社会的スキルが園での社会的スキルの実行に影響を及ぼすとして「母親の養育態度→家庭における幼児の社会的スキル→園における幼児の社会的スキル」というプロセスを仮定している。そして幼稚園児とその母親および保育者の協力のもとに調査を実施し、このプロセスの妥当性について検証した。

その結果、母親の過保護は家庭における幼児の主張スキル、自己統制スキル、協調スキルに負の影響を及ぼし、受容的態度は家庭における幼児の自己統制スキルに正の影響を及ぼしていた。また、家庭における社会的スキルは、園における同質の社会的スキルに正の影響を及ぼすことが明らかとなった。すなわち、「母親の養育態度→家庭における幼児の社会的スキル→園における幼児の社会的スキル」というプロセスが支持されたのである。中台・金山（2004）は、子どもの社会的スキルの学習に影響を及ぼす親の役割を研究していくことで、子どもの社会的適応状態を向上させるための有効な介入法を開発することが可能になると考察している。

本研究では、中台・金山（2004）を参考に、幼児の問題行動に及ぼす母親の養育態度の影響について「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」というプロセスを仮定し、これを検討した。幼児の社会的行動は、円滑な対人関係を形成、保持していくために必要な社会的スキルと対人関係を阻害する問題行動の両面からとらえられる必要がある。両者は裏返しのように受け取られがちであるが、例えば、主張スキルを積極的に実行しないことが引っ込み思案である、あるいは引っ込み思案でなければ主張スキルがあるとは必ずしもいえないように、実際にはそれぞれ独自にとらえられる必要があるものである。問題行動が社会的スキルと同様に社会的に学習される行動であるならば、上記の中台・金山（2004）が提示するプロセスは問題行動についても当てはまるものと考えられる。適応的な行動すなわち社会的スキルの学習プロセスのみならず、不適応的な行動すなわち問題行動の学習プロセスを明らかにすることは、子どもの社会的適応を促したり、将来の不適応を予防したりするための介入法の開発に貢献すると考えられる。

方法

参加者

埼玉県の幼稚園2園9クラスの幼児180名（年少児57名・年中児56名・年長児67名）とその保護者および担任教諭9名。なお、測度によって有効回答者数に違いがあったので、分析対象者数は分

析ごとで異なっている。

測度

母親の養育態度 中台・金山 (2004) の養育態度尺度を使用した。彼らはParker (1979) の理論に基づいて母親の養育態度を「受容」と「過保護」からとらえるための尺度を作成した。「受容」と「過保護」の2下位尺度、それぞれ8項目から構成される。母親に4点尺度で回答を求めた。

家庭における幼児の問題行動 中台・金山 (2002) が作成した園における幼児の問題行動尺度13項目を家庭用の表現に変更し、「家庭における幼児の問題行動」の指標として用いた。家庭および近隣における幼児の普段の行動について母親に5点尺度で評定を求めた。

園における幼児の問題行動 中台・金山 (2002) の園における幼児の問題行動尺度13項目を用いた。「不注意・多動行動」(4項目)、「引っ込み思案行動」(5項目)、「攻撃行動」(4項目)の3下位尺度から構成される。園における幼児の普段の行動について担任教諭に5点尺度で評定を求めた。

手続き

担任教諭には園児の行動について評定を直接依頼し、母親には園を通じて、自分の養育態度および自分の子どもの行動について評定を依頼した。各尺度は、記入後、園に集められたものを回収した。本研究は、園長、担任教諭および親の了解のもとで実施された。

結果

測度の構成

母親の養育態度 中台・金山 (2004) の尺度構成にしたがって、クロンバックの α 係数を算出した結果、「受容」は.81、「過保護」は.69と、過保護の値が少し低いものの、ある程度の内的一貫性が確認された。分析には、各下位尺度に含まれる項目の得点を加算した下位尺度得点を用いた。

家庭における幼児の問題行動 13項目に主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。園における幼児の問題行動(中台・金山, 2002)の因子構造を考慮して因子数を3に指定した。その結果、表1のように、「不注意・多動行動」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」の3因子が抽出された。これら3因子は中台・金山 (2002) が作成した園における幼児の問題行動尺度において見出された3因子と共通していた。クロンバックの α 係数を算出した結果、「不注意・多動行動」は.82、「引っ込み思案行動」は.66、「攻撃行動」は.69と、「引っ込み思案行動」と「攻撃行動」の値が少し低いものの、ある程度の内的一貫性が確認された。分析には、各下位尺度に含まれる項目の得点を加算した下位尺度得点を用いた。

園における幼児の問題行動 中台・金山 (2002) の尺度構成にしたがって、クロンバックの α 係数を算出した結果、「不注意・多動行動」は.87、「引っ込み思案行動」は.68、「攻撃行動」は.82と、「引っ込み思案行動」の値が少し低いものの、ある程度の内的一貫性が確認された。分析には、各下位尺度に含まれる項目の得点を加算した下位尺度得点を用いた。

表1 家庭における問題行動の因子分析結果

	I	II	III	
I 不注意・多動行動 $\alpha = .82$				
そわそわしたり、落ち着きがない(多動である)	.82	-.01	.03	
注意散漫である	.81	.08	-.01	
きまりや指示を守らない	.67	-.02	.12	
不注意である	.67	.03	-.15	
II 引っ込み思案行動 $\alpha = .66$				
さびしそうにしている	.08	.77	.01	
他の子どもたちと一緒にいるとき不安そうである	-.02	.71	-.05	
友だちとの遊びに参加しない	.06	.68	-.23	
悲しそうであったり、ふさぎこんだりする	-.13	.55	.27	
ひとり遊びをする	.04	.22	.02	
III 攻撃行動 $\alpha = .69$				
人や物に攻撃的である	-.16	.06	.83	
他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする	.35	-.12	.54	
他の子どもと口論する	.04	-.13	.46	
かんしゃくもちである	.08	.28	.38	
因子間相関				
	I	1.00		
	II	.12	1.00	
	III	.44	.35	1.00

母親の養育態度が幼児の問題行動に及ぼす影響

「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」というプロセスを重回帰分析により検討した。まず、母親の「受容」と「過保護」を独立変数、家庭における幼児の「不注意・多動行動」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」それぞれを従属変数とした重回帰分析を行った(表2)。その結果、「不注意・多動行動」に有意な重相関があった。標準偏回帰係数を見てみると、母親の「受容」が有意な負の影響を及ぼしていた。また、「攻撃行動」にも有意な重相関があった。標準偏回帰係数を見てみると、母親の「受容」が有意な負の影響を及ぼし、「過保護」が有意な正の影響を及ぼしていた。「引っ込み思案行動」には有意な重相関がなかった。

表2 「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動」重回帰分析結果

	家庭における問題行動		
	不注意・多動	引っ込み思案	攻撃
受容	-.23 **	-.08	-.28 **
過保護	.04	.06	.19 *
重相関係数	.24 *	.11	.37 ***
値は標準偏回帰係数 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$			

次に、母親の「受容」「過保護」および家庭における幼児の「不注意・多動行動」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」を独立変数、園における幼児の「不注意・多動行動」「引っ込み思案行動」「攻撃行動」それぞれを従属変数とした重回帰分析を行った(表3)。その結果、園における幼児の「不注意・多動行動」に有意な重相関があった。標準偏回帰係数を見てみると、家庭における幼児の「不注意・多動行動」が有意な正の影響を及ぼしていた。また、園における幼児の「攻撃行動」にも有意な重相関があった。標準偏回帰係数を見てみると、家庭における幼児の「不注意・多動行動」と「攻撃行動」が有意な正の影響を及ぼしていた。園における幼児の「引っ込み思案行動」には有意に近い重相関があった。標準偏回帰係数を見てみると、家庭における幼児の「不注意・多動行動」と「引っ込み思案行動」が有意な正の影響を及ぼしていた。

表3 「母親の養育態度・家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」重回帰分析結果

	園における問題行動		
	不注意・多動	引っ込み思案	攻撃
受容	.03	.05	.02
過保護	-.01	.07	.10
家庭	不・多	.33 ***	.19 *
	引込み	-.14	.20 *
	攻撃	.15	-.08
重相関係数	.40 ***	.27 †	.44 ***

値は標準偏回帰係数 † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

以上の結果をまとめて図示したのが図1である。図1では標準偏回帰係数が有意であった結果のみを示した。

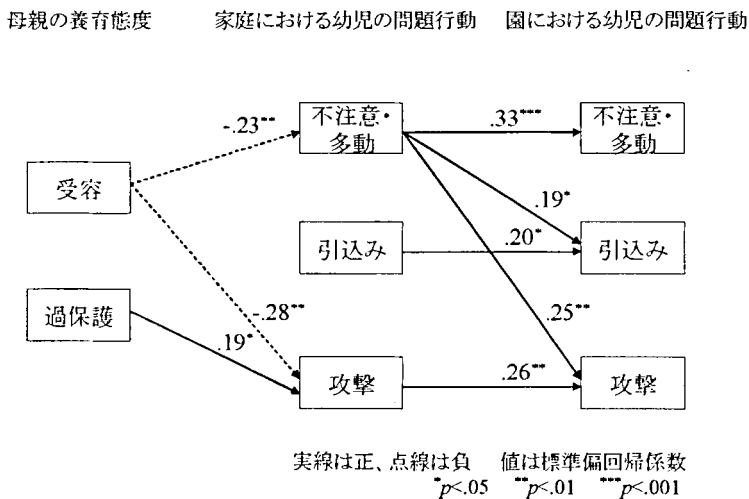


図1 「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」パス・ダイアグラム

考 察

母親の養育態度と家庭における幼児の問題行動との関係については、母親の受容的態度が不注意・多動行動と攻撃行動に負の影響を及ぼし、過保護が攻撃行動に正の影響を及ぼすことが明らかとなった。中台・金山（2004）の尺度項目からすると、受容得点が低い母親は子どもをほめるよりも叱ったり注意したりすることが多く、子どもがぐずぐずしたりまごまごしていると早くするように注意したりすることが多い傾向にある。幼児はこうした母親の態度から攻撃行動をモデリングしていると考えられる。また、母親から早くするようにと頻繁に注意されるので、これを回避するために落ち着きなく動くという負の強化によって不注意・多動行動を学習していると考えられる。逆に、中台・金山（2004）の尺度項目にあるように、母親が忙しい時でも手を休めて子どもの話を聞くといった受容的態度で接すれば、幼児の攻撃行動や不注意・多動行動といった外在化問題行動は抑制される可能性がある。また、母親が幼児を過保護に育てることは幼児の攻撃行動を助長させるおそれがあると考えられる。幼児の攻撃行動の抑制には、ある程度の制限的なしつけが必要だろう。

母親の養育態度と幼児の引っ込み思案行動との関係については有意な結果が得られなかった。母親の養育態度と幼児の引っ込み思案行動には関係がないのか、それとも本研究で扱った母親の養育態度すなわち受容と過保護とは関係がないだけなのか、後者であるならば、幼児の引っ込み思案行動に関係する母親の養育態度とはどのような態度なのか今後検討する必要があるだろう。

家庭における幼児の問題行動は園における同質の問題行動に正の影響を及ぼしていた。これは中台・金山（2004）によって報告された家庭における社会的スキルと園における社会的スキルとの関係と一致するものである。家庭で観察される行動は園においても同じように見受けられる可能性が高いといえる。

特徴的なのは、家庭における不注意・多動行動が園における不注意・多動、引っ込み思案、攻撃のいずれの行動にも正の影響を及ぼしていたことである。園という集団生活を基本とする場面では、不注意・多動といった行動特徴を示す幼児は、周囲の仲間とトラブルを起こすリスクが高いと考えられる。その結果、保育者から攻撃的と認知されてしまうのではないだろうか。また、不注意・多動行動を示す幼児は、自分で集団から逸脱してしまう傾向が強だけでなく、仲間から拒否されやすい（Frankel, Myatt, Cantwell, & Feinberg, 1997）ので、保育者から「仲間との遊びに参加しない」「ひとり遊びをする」といった引っ込み思案項目を高く評定された可能性が考えられる。家庭における不注意・多動行動は園における問題行動に幅広い影響力をもつことが示唆された。家庭における幼児の不注意・多動行動は、母親の受容的な養育態度から負の影響を受けていた。幼児の不注意・多動行動は母親の受容的態度によって抑制される可能性があるため、母親の養育態度の影響をも考慮した介入法を検討していくことが重要だろう。

母親の養育態度は、家庭における幼児の問題行動を通じて間接的に園における幼児の問題行動に影響を及ぼしていることがわかった。本研究の結果は「母親の養育態度→家庭における幼児の問題行動→園における幼児の問題行動」というプロセスを支持するものといえよう。

これまで幼児の問題行動に対しては、先述のような予防的視点に基づいた介入指導が保育所や幼稚

園において実践されてきた（例えば、佐藤・佐藤・高山，1993）。しかし、本研究の結果は、幼児の問題行動に対してはそうした園における取り組みだけでなく、養育支援を中心とした家庭における取り組みを積極的に展開する必要があることを示唆している。具体的には、母親を中心とした養育者に適切な養育スキルを教授するなどの取り組みが考えられるだろう。今後、実践を通じた検討を重ねていきたい。

文 献

- Frankel, F., Myatt, R., Cantwell, D. P., & Feinberg, D. T. 1997 Parent-assisted transfer of children's social skills training: Effects on children with and without attention-deficit hyperactivity disorder. *Journal of American Academy of child and Adolescent Psychiatry*, **36**, 1056-1064.
- King, C. A., & Kirshenbaum, D. S. 1992 *Helping young children develop social skills: The social growth program*. Belmont, CA: Brooks / Cole Publishing Company.
- 前田健一 2001 子どもの仲間関係における社会的地位の持続性 北大路書房
- 中台佐喜子・金山元春 2002 幼児の社会的スキルと孤独感 カウンセリング研究, **35**, 237-245.
- 中台佐喜子・金山元春 2004 母親の養育態度が幼児の社会的スキルに及ぼす影響 家庭教育研究所 紀要, **26**, 61-66.
- 中澤 潤 1996 社会的行動における認知的制御の発達 多賀出版
- Parker, G. 1979 Parental characteristics in relation to depressive disorders. *British Journal of Psychiatry*, **134**, 138-147.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練—コーチング法の使用と訓練の般化性— 行動療法研究, **19**, 13-27.
- 吉村 英 2003 社会的スキルと攻撃性 京都女子大学教育学・心理学論叢, **3**, 87-111.

謝 辞

本研究にご協力を賜りました幼稚園の園長先生をはじめ諸先生方ならびに保護者の皆様、園児の皆様に深く感謝申し上げます。